



市民がつくるまちづくり情報誌 コミュニティくさつ

2008年
秋冬号



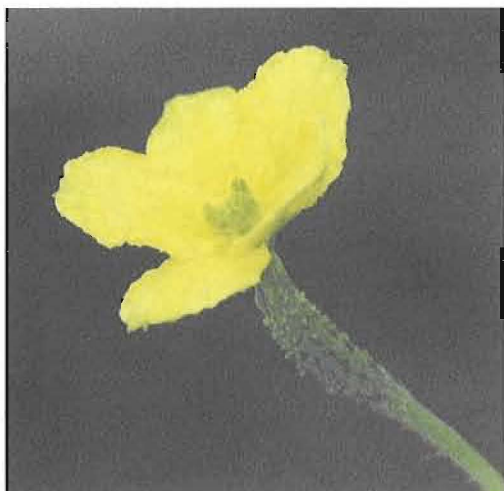
つくる
なぞ
まわす
知恵

カイツブリの赤ちゃん

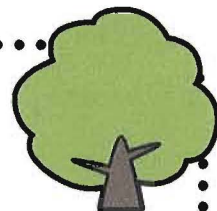
初夏に誕生した可愛い2羽のカイツブリ(県鳥)。親鳥は朝霞から晩まで息つく暇もなく潜っては餌をとり、せっせと雛鳥に運ぶ子育ての姿は、ほほえましくもあり、涙ぐましくもあり。これからの世代に住み良い環境を残してあげたい。(水生植物公園みずの森にて撮影・大條絃史)

何の花かな？

夏、沢山食べましたね。苦くて嫌いですか？ (答は8ページ)



内容～コンテンツ～



- ②捨てるものがない農家の暮らし 山本勝廣さん
- ③もみ殻の利用 薫炭づくり
- ④親親から学ぶ
私たちは先人から何を学び、何を伝えるのか
琵琶湖博物館 専門学芸員 牧野厚史さん
- ⑤～⑦ 座談会 昔の暮らしから見つけよう
つくる・なぞ・まわす知恵
- ⑧俳句散歩「秋」
- ⑨動植物から学んで素敵なヒトになろう
- ⑩～⑪ ゆっくり草津街道物語⑦「志那街道と志那三郷」
- ⑫お知らせ





捨てるものがない!? 農家の暮らし

エコの達人

山本勝廣さん

矢橋街道沿いにある山本さんを訪ねると、家の前に実をつけたゴマの枝が干してありました。今では、ゴマを栽培している農家は少ないので、手間ひまをかけてでも安全でおいしいものを「作る」「食べる」という山本さんのこだわりが感じられ、「今日は良いお話が聞けそうだ」と期待が膨らみます。兼業農家であった山本さんも、今では退職され農業をしながら自分流の生活を楽しまれています。

まず稲作を中心とした農家の一年の暮らしぶりからお話をうかがいます。

田植えと水

農業と言えば五月の田植えから始まるように思われますが、実はその1ヶ月前から苗づくり、土づくりを始めます。「催芽」と言って、それまで眠っている状態だった種もみを水につけ、発芽させます。発芽した苗は、温室に入れられ、田植えの日まで毎日水をやりながら、大切に育てられます。

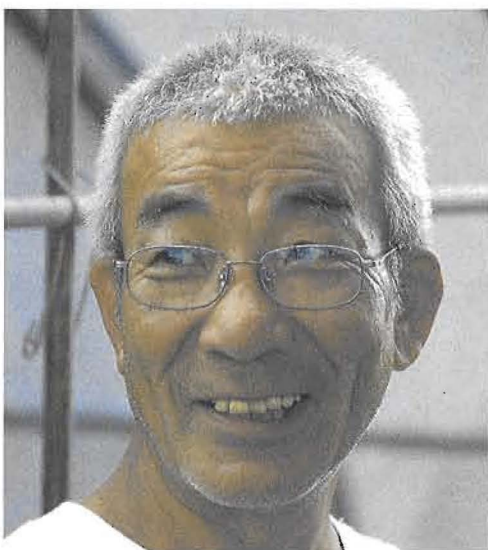
田植えは昔のように日が決まっていた、全部の農家が一齐に植え始めた光景はもう見かけなくなりました。機械植えになった現在の田植えは、おおかた一日で終わってしまいます。

現在の米づくりは、収穫量より味が優先されます。おいしい米をつくるには、水の見回りと肥料を与えるタイミングにかかってくる。また肥料や農薬を散布したときの田んぼの水は、そのまま川に流さないように注意しています。今は一時期に比べて川の水もきれいになり、この辺りではメダカやニゴロブナ、シジミなども見かけるようになりました。

自然の力と向き合う、活かす

農業は雑草との戦いでもあります。昔は雑草の根を切るとともに、土に新鮮な酸素を入れるため、手押除草機を押していました。もちろん、これだけでは除草しきれないので、後は人の手によることとなります。暑い日も雨の日も、特に雑草が伸びる梅雨から夏にかけて何回もするこの作業は、田んぼの中を這うような仕事から「のたり」と呼んでました。この名前からも、その過酷さがうかがえ、今では、不本意ながら除草剤を散布する農家が多いのも分かる気がします。

もう一つ、夏の大切な作業があります。「中干し」と言って、水を抜いて田んぼがひび割れるほど、カラカラの状態にします。これは水中にあった土に酸素を入れたり、余分な茎を増やさせない「無効分結」を抑える効果などがあります。稲からすれば、今まで豊かにあった水がいきなくなるとは、今まではビックリして、栄養や水分をできるだけ吸収しようと



して、下へ下へと根を生やそうとします。こうして秋に多くなる台風にも負けない強い根ができるわけです。

こうした暑い夏が過ぎた9月、「コシヒカリ」や「キヌヒカリ」といった比較的収穫時期の早い品種から、稲刈りが始まります。いつまでもなく刈り取りのタイミングは米の品質や収穫量を大きく左右しますから、近所の田んぼの様子を見たり、農家と話したりと、情報を集めながら、慎重に刈るタイミングをはかりますが、最終的にはやはり稲の穂を見て刈る時期を決めます。

稲刈りが終わってできる稲わらも大切に使います。一部はそのまま、たい肥として田に鋤き込み、土を返して翌年のための土づくりを活かします。農作業に牛を使っていたころは、切ったわらを牛に食べさせ、その牛ふんを田に入れたりもしていました。もちろん田んぼだけではなく、畑の野菜づくりや、しめ縄など暮らしの一部にもわらは重宝するものでした。また玄米にする際に出るもみ殻も、田んぼにそのまま撒けば堆肥になるし、**熏炭**（くんたん、下参照）にして畑の種まきなどにも利用します。畑があるので家の生ゴミも全部畑の土に入れていきます。このように、田畑から出たものは全部田畑の土に還すよう心がけています。農業の暮らしこそ、無駄のないエコの生活だと思えます。

すべては土に還す

木箱いっぱいのもみ殻からりんごが顔を出す…そんな光景もめっきり見なくなりました。かつて「もみ殻」はこのようなクッション材や、釜でご飯や煮物をつくる燃料としても活躍しました。また、大豆をわらで包み納豆をつくるときの保温材として使われることもありました。まだまだもみ殻の利用法はあります。ここでは本文にも登場した畑を元気にしてくれるもみ殻の利用法として、糞炭（くんたん）を紹介します。

煙突を通したカウの灯油缶を囲むように、もみ殻がピラミッドのように積み上げられています。灯油缶の中では、わらなどが燃やされ、その熱でもみ殻を蒸し焼きの状態にします。もみ殻の中から顔を出している煙突から最初に出てくる煙には水分が混じっています。この水蒸気は木酢液で、プランターなどに撒いて農薬の代わりとします。これも何一つムダにしない農業ならではのところでしょうか。

徐々にもみ殻が黒くなり、辺りには煙のにおいが広がります。山本さんは様子を注意深く見守りながら、灰になってしまわないように表面部分と中心部分のもみ殻をスcoopで返す作業を幾度も繰り返します。こうしてゆっくりと時間をかけてつくられた薫炭は充分冷ましてから袋詰めします。

このようにしてつくられた薫炭、どのように畑を元気にしてくれるのでしょうか。薫炭は黒いので土が熱を吸収しやすくなること、畑の土を作物に良いアルカリ性にする働きがあること、



炭化しているので腐らず、メタンガスが発生しにくい、土に空気を含み水はけが良くなる…など肥料としてではなく、土壌改良や発芽育成の役目をしてくれるそうです。

農作を中心にした営みには米をつくるどころから刈り取った後まで当たり前のように「つくる・なおす・まわす知恵」がふんだんに見られました。また、刈り取られた田んぼで、煙をあげる景色やその匂いは、私たち日本人のどこか懐かしい、ホッとさせてくれる原風景かも知れません。昔はどこでも見られたこの秋の風物詩も、今はほとんど見られなくなってしまいました。現代はあふれるくらいモノが豊かにある時代です。貧しさも不便さも、心の豊かさで補っていた時代に、今の私たちが学ぶべきことは多いのではないかと思うこのごろです。



おやおや

親親から学ぶ

私たちは先人から何を学び、何を伝えるのか

琵琶湖博物館
専門学芸員 (地域社会学)
牧野厚史さん

モノの展示でなく、コトを再現

今号では「つくる・なおす・まわす」のテーマで昔の暮らしの様子や農業について取り上げながら「環境」を考えました。そこには様々な知恵も工夫もありました。でも「時代がちがう。」「私には田んぼも畑もない。」との声も聞こえてきそうです。

そこで「私はどうすれば？」の素朴で深い疑問に対するヒントを見つけたくて、琵琶湖博物館学芸員の牧野厚史さんを訪ねました。牧野さんは博物館でも人気の展示ブース「富江家」に案内してくれました。彦根市南部、琵琶湖に近い本庄町の農家の住宅を移築・再建し、当時のくらしを復元しています。

「私たちのすぐ先輩たちが暮らしの中でどのように水を使ってきたのかが分かるようになっていきます。そのためモノを展示するのではなく、コトを再現することによって、わたしたちが聞いています。」「昭和39年5月10日を想定し、井戸の水と力ワ（水路）の水を取り込んだ力ワや、樽型の蒸し風呂、



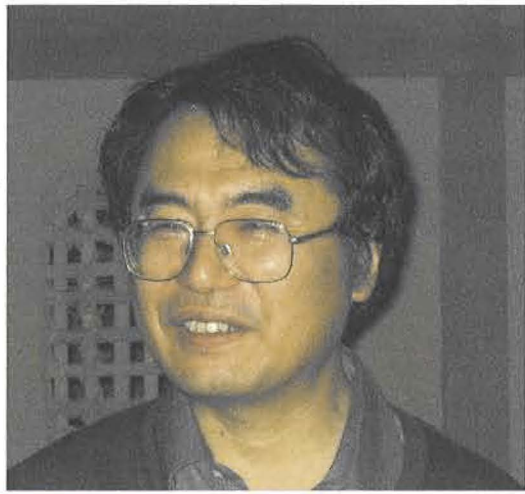
でも博物館の展示は昔の事柄が中心です。私たちは昔の暮らしに戻ることにはできません。単なるノスタルジーをこえて未来に過去を活かすことは本当に可能なのでしょうか。「動物や植物は種を保存し、生き抜くために、時代や環境に合わせトライ&エラーをしながら長い時間をかけて進化したと聞いています。人々もこのトライ&エラーをしてきたわけですが、人間の場合は、後世の人間に体験を『伝える』ことで同じエラーを繰り返さない工夫をしてきました。

くみとり式の便所など、一つひとつのモノの背景にある家族や当時の人たちの関わり、暮らしぶり、考え方など様々な物語が伝わる工夫がされています。

「人は、水のような環境に一人で働きかけているわけではありません。社会の一員として環境に関わっています。そのような人々の行動に関心を持ち、その背後にある人々の関係や価値観から、未来への指針を考えています」。

トライ&エラー

でも博物館の展示は昔の事柄が中心です。私たちは昔の暮らしに戻ることにはできません。単なるノスタルジーをこえて未来に過去を活かすことは本当に可能なのでしょうか。「動物や植物は種を保存し、生き抜くために、時代や環境に合わせトライ&エラーをしながら長い時間をかけて進化したと聞いています。人々もこのトライ&エラーをしてきたわけですが、人間の場合は、後世の人間に体験を『伝える』ことで同じエラーを繰り返さない工夫をしてきました。





富江家の展示からは、洗濯後の汚れた水や風呂の残り湯はシヨウベンダメと呼んだ汚水槽に溜め、畑の肥しに使われていたことも知りました。これは「汚水を直接、川に流してはいけない」という水を大切にするためのルール、そしてそのまま流すのは「もったいない」という感覚からの工夫です。当時の人たちはもちろん今のようないたんです。富江家の暮らしと牧野さんの話から、今、私たちが「何を知り、何を伝えていくべきなのか？」少しヒントをもらえた気がします。

(茶木修一)

ただ、過去の体験のなかでも良い印象だけに注目すると、『なつかしい』『あの時はよかった』というノスタルジーになりがちです。ノスタルジーもよいのですが、それだけでは現状を改善する指針にならないでしょう。つまり先人である親たちが積み重ねてきたありのままの過去の体験にも私たちは向き合えないと、前に進めないのだと思います。今を生きる私たち自身も親親として、後世に伝える値打ちのある様々な生活体験を持っているのではないのでしょうか。

富江家の展示からは、洗濯後の汚れた水や風呂の残り湯はシヨウベンダメと呼んだ汚水槽に溜め、畑の肥しに使われていたことも知りました。これは「汚水を直接、川に流してはいけない」という水を大切にするためのルール、そしてそのまま流すのは「もったいない」という感覚からの工夫です。当時の人たちはもちろん今のようないたんです。富江家の暮らしと牧野さんの話から、今、私たちが「何を知り、何を伝えていくべきなのか？」少しヒントをもらえた気がします。

座談会

昔の暮らしから見つけよう

つくる・なおす・まわす知恵

座談会では、昔の暮らしや遊びの様子を実際にみんなで思い出しながら、今回のテーマである「草津のエコ つくる・なおす・まわす知恵」を考えました。当時のモノや写真などを持ち寄ったせいか、みんなで集まることで記憶が記憶を呼んだのか、遊び歌あり、ジェスチャーありと楽しく盛り上がった時間となりました。話題も衣食住を中心にした暮らし、近所づきあい、遊び、風習、言い伝え、農業や産業などまで広がり、「今で言ったらエコ？」というような様々な「つくる・なおす・まわす知恵」がいたるところにあったこともわかってきました。



もちろん今の時代に、それらをそのまま戻すことはできませんが、その中から5つのヒント「エコにつながるポイント」をお伝えします。

①モノゴトに対する深い知識をもとう！ (見つめる力・見つける力)

現在のような便利さも、モノの豊かさもない時代背景の中で、暮らしや生業、子どもの遊びやおやつに至るまで「ないものから作り出す工夫」「今あるものの用途を広げていく知恵」がありました。そこにはモノの性質や特性、コトのもつ意味、その地域の風土や気候などの深い知識が根底にあって、モノゴトを見つめる力、見つける力が日々の暮らしの中で養われていたのでしょう。



(座談会から)

- ・昔は通り庭があり、窓や戸を開けっ放していた。風通しの良い建て方だった。建て方もエコだった。
- ・夏は、たらいの日なた水で行水をした。残った水はブリキのひしゃくで庭木の水撒きに使った。
- ・五右衛門風呂の水はバケツ約7杯分。蒸し風呂もあった。水汲みは子どもの仕事だった。

(座談会から) *前頁のつづき

- ・肥後守を持ち歩き、竹や鉛筆を削ったりした。器用な子どもばかりだった。
- ・糸の端に紙、もう片方の端に石をつけ、空中に投げる。飛んでいるトンボに絡まってトンボが落ちてくる。オニヤンマを捕ると英雄になれる。オニヤンマは子どもの憧れだった。
- ・生ゴミを捨てる場所にはシマミミズがいるので、魚つりのエサにした。
- ・石臼でもち米を挽いたり、炊いたご飯を布袋に入れ、水につけて糊をつくった。ちょっとしたことから、ご飯粒をつけてくっつけた。
- ・井戸（ガッチャンポンプとつるべ）では、まず呼び水を貯めてから水を汲み上げる。
- ・新聞紙や稲わらは必需品で、稲は縄、しめ飾り、土壁などに使った。家をつくるときの土壁はみんなが手伝った。新聞紙はよく使った。おにぎり・卵・はったいこなどを包んだり、鉄砲（音が鳴る）やカブトをつくって遊んだりした。

②五感をフルに活用しよう！

座談会でみんなが気づいたことの一つに「匂い一つとっても昔は豊かだった」ということがありました。どの家も今のように機密性が高くなかったせいか、各家庭の夕食のメニューが何か分かるような、豊かな匂いの世界があったようです。もちろん夜店のアセチレンガス、牛や馬の糞の匂い、のつぼ、車の排気ガスなど、今で言えば嫌煙されそうな匂いも暮らしの一部でした。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚といった五感が常に刺激される暮らし、五感をフルに活用する暮らしがそこにはありました。エコのポイントその②のキーワードは五感生活です。



(座談会から)

- ・給食に脱脂粉乳、チーズがあり、おいしくもなく食べるのが嫌だった。
- ・露店のアセチレンガスの匂い。
- ・牛を飼っていたので蚊が多く、野菊、除虫菊をくべた。ヨモギをコンロでいぶしたり、杉の葉を燃やした。おばあさんは畑仕事するとき、蚊よけのため、ポロギレをいぶして腰にぶら下げていた。
- ・昔の家は木、紙、土壁でできているので隙間があり隣近所の夕食などの匂いがよくわかった。子どもは匂いを嗅ぎ分けられた。
- ・今は嫌煙される車の排気ガスも自動車が出回りだした頃は良い匂いを感じて車についてまわった。
- ・野つぼがいたるところにあった。

③タテにもヨコにもある豊かなコミュニティ！

近所の５軒くらいでお風呂をまわす「もらい風呂」に代表されるように、自分、あるいは家だけで解決できないことも、隣近所との連携、横のつながりで、様々な困難ものり切っていたことがわかりました。それは「困ったときはお互いさま」といった助け合いの気持ち、ごく自然にあったこと、そして地域の人たちが大体、似た生活スタイル、生活リズムで暮らしていたこともあるようです。また子どもたちが上級生から遊び方やおもちゃづくりを教わっていたように、世代、年代を超えたタテのつながりもありました。そこは子どもたちにとって、学校とは違う学びの場。上級生にからかわれたって、時にはいじめられたって、そこから多くのことを自ら学びとりました。それは楽しさだけでなく、「これ以上したら危ない



んだよ」「上の者が下の面倒をみる」といった教科書には載ってないけど、生きていく上で大切な人生の教訓も遊びの中から会得していったのです。

今では煩わしさが先にきてしまうタテやヨコのつながりも、暮らしの中では大切な要素の一つでした。

(座談会から)

- ・寝るときはアルミの湯たんぽを布団の中に入れた。湯たんぽは家族の人数分あった。
- ・寝るときには、炭を入れた「かわらこたつ」や「やぐらこたつ」を家族で囲み、こたつを中心に放射線状に布団を敷き足元の暖をとった。
- ・おもちゃは年上の子の作ったものを見よう見まねで作り、年の差に関係なく遊んでいた。だいたい上から下まで10歳くらいの年齢差があった。
- ・ゴムとびでは、スカートの裾をブルマにはさみ「さわりなや～」と言いながら跳んだ。

④自然や生活の営みにあった時間の流れを！



陽が昇れば起きて、陽が沈めば家に帰る。といった生活のリズムも、今では難しくなってきたのかも知れませんが、この当たり前のリズムはやはり自然との共生といった点でエコにつながっていたのだと思われます。また、お百姓さんに現金がなく時期でも、お店がお米や麦の収穫まで支払いを待ってくれていた話からも、そういう時間のテンポで社会全体がまわっていたことがわかります。ここでも自分たちのことばかりでなく、他を理解し思いやる気持ち、「困った時はお互いさま」の精神が脈々と流れていたことがわかります。エコのポイント④は生活のリズムです。

(座談会から)

- ・父から順番に行水をした後、浴衣姿で家の前に床机を出し、将棋をしたり夕涼みをしていた。子どもたちはその横で花火をしていた。
- ・百姓は現金がなく、お米や麦を収穫したときに支払いする。お店も支払いを待ってくれる。そういう時間のテンポで生活していた。

⑤もったいない。 買い替える前に、直してみよう！

座談会の中では、傘の骨や、鍋・やかんの穴、下駄の歯入れや、包丁の刃物研ぎまで、多くの「直すこと」「メンテナンスすること」を職業としている人たちが登場しました。もちろん、壊れやすかったということもありますが、「もったいない。直すのが当たり前」といった考え方があったからこそ、これらの修理が職業として成立していたのでしょう。もう一つ特徴的なのは、これらの人たちも含め、暮らしに密着したものや、旬の食材など、いわゆるモノ売りの人たちが折にふれ、まちにやってきました。今のようにスーパーで消費者が好きな時に好きなものを購入できるわけではありませんから、必然的に少量生産、少量消費となるスタイルでした。皆さんも「安いから買い換える」のではなく、「一度、直るかな」と考えてみませんか。一度直すと、愛着がわくものです。

(座談会から)

- ・着物をほどこいて伸子張りや洗い張りをし、作り直した。着物はすべて直線でできていて仕立て直しができる。(今で言うリサイクルのひとつ)
- ・鋳掛け屋さん(洗面器・鍋・釜・やかなど穴があいたところを塞いでくれる)
- ・たがやさん(桶や樽のたがを取り替える)。鼻緒のすげ替え・下駄の歯を直す歯入れ屋
- ・のこぎりの目立て・包丁やのこぎりの刃物研ぎ

俳句散歩「秋」

「おしなべて物を思はぬ人にさへ心をつくる 秋のはつかぜ」
と西行法師が詠ったように、秋になると人はなぜか五感が敏感になり自然を愛でる詩人になり、人生を考える哲学者になります。

今日は我々になじみの深い良寛さんの俳句を読んでみましょう。（解説 橋詰辰夫）

焚くほどは

風がもて来る

落ち葉かな

良寛

子どもたちと手毬で遊んだり、かくれんぼをして朝までかくれていたりにして、いたと言われる良寛さんは、おかしな坊さんと思われています。

でも本当は漢詩・和歌・俳句などの詩歌に才能を持ち、書も素晴らしい、芸術や思想などに関する文章も数多く残した立派なお坊さんだったようです。

この句は、時の殿様が寺を建てて城下に良寛を呼び寄せようとしたときの殿様への返事として詠んだと言われています。

「殿様の篤い援助をいただかなくとも、朝晩の炊事をする落葉ぐらひは、風が持つてきてくれます」と。と断つたのです。そのくらい質素な生活をし、宗教上の地位や出世には全く感心がなく無欲の人生を貫いたのです。

（注）落葉は冬の季語ですが、晩秋から初冬にも見られるので本秋号に入れました。

うらを見せ

おもてを見せて

ちるもみじ

良寛口伝

良寛さんの晩年に、貞心尼という心の友が登場します。良寛が病の床に伏し、貞心尼に逢いたいので来て欲しい、と歌を届けると、彼女は早速駆けつけてくれました。良寛は彼女の顔を見て

いついつと

まちにしひとは きたりけり

いまはあひ見て なにかおもはむ

と歌を歌に託しています。

いよいよ良寛が臨終間際となり貞心尼がいよいよ

いきしにの

さかいはなれて すむみにも

さらぬわかれの あるぞかなしき

と詠み、仏門に仕える身で生死を超越しているのに、でもやはりお別れは悲しいですよと嘆きました。

「何の花かな？」

こたえ

ゴーヤ（ニガウリ）の雌花です。最近は家庭菜園や住宅の日除けによく栽培されています。キュウリと同じように雌雄別々の花が咲きます。雌花の下にはもうゴウヤの赤ちゃん（子房）ができています。

良寛に別人が訪れたこの話を、貞心尼にへ返事としたのです。もみじは裏も表も見せて、きれいに散ります。我が身も同じです、悲しみなさるな、と言いつつながら冥界へと旅立つて行きました。

この句は良寛の作ではありませんが、良寛の口から出た最後の句だと言われています。

この二人のやり取りの何ときれいなことでしょうか。ある良寛研究者が「聖愛」と呼んだ二人の心のやり取りは一つの芸術作品になっています。いやあ、やっぱり秋は、人の心を作るんですね。





動植物から学んで 素敵なヒトになろう！

10月も下旬になると、ジョウビタキが庭にやってくる。ツワブキが咲き、色とりどりの小菊が咲きだすところである。スズメくらいの大きさの愛らしい野鳥で、お目当てはランタナの黒い実。

オスは胸から腹のオレンジ色が鮮やかで、黒い翼の中の白い紋様が目立つ。中国・サハリンなどからの渡り鳥で、縄張り意識が強い。琵琶湖の水鳥も日増しに賑わってくるころ、庭ではカリンやユズが黄色く色づき、ドウダンツツジが紅葉して秋が足早に深まっていく。

渡りにしても、縄張りにしても彼らは生きるに必要な自分の餌場確保のための行動である。

サブプライムローンに端を発した世界的経済の恐慌は世界同時株安、円高へと無限に深刻化している昨今であるが、動植物は季節に正確に反応し、木々には実もなり、紅葉も進んでいる。

身近に楽しみをたくさん見つけられる草津は「まさによいとこ」だと常々嬉しく思っている。

郊外に出ると荒れ果てた休耕田が多く、最近では収穫意思の不明な大豆畑もよく見かける。

私の畑では、黒豆が豊作でビールに格好のアテになった。正真正銘の無農薬栽培でも結構な収穫であった。株ごと引っっこ抜くと、根には根粒がついていて、久しぶりにしげしげと観察した。

マメ科の植物だから不思議がることもないけど、考えるほどに巧妙な仕組みに感激する。そもそも、限りある資源を地球規模で奪い合っている人間とちがって、植物は地球上に無尽蔵にある資源を有効利用しているのではないか。

まずは、なつかしい炭酸同化作用。太陽エネルギーを利用し、葉緑素の働きで空中の二酸化炭素（あの嫌われ者の CO_2 ）と根から吸収する水（ H_2O ）のみで糖やデンプンを作り出しているのだ。これだけの材料だから、糖やデンプンは炭素（C）、水素（H）及び酸素（O）の3元素からできている。でも、タンパク質をつくるには窒素（N）が必要だが、地中では不足しやすい。そこで、登場したのが根粒バクテリア。何と、こ

第14回

身近にある 多くの楽しさ・ヒント

文・絵 矢原 功

れまた空気の主たる成分である窒素を元にアンモニア（ NH_3 ）を作る（窒素固定）スゴ腕である。こうして、タンパク質の合成要素さえも無限の資源からゲットしているのには感服いたします。宿主との共生もいい手段ですね。

おかげで、種子である豆には大量のタンパク質を蓄えることができる。

「アリガタヤ！根粒バクテリアさま～」と言いながら、エダマメを口に放り込むのであります。



大豆のオーナー畑で活性化をはかっている地域もあれば、休耕田を利用したホンモロコ養殖は草津のほかでも進められている。それでなくとも、狭い島国。農薬入りやら遺伝子組み換え食材に浮き足立つばかりでなく、耕地を大切に考えて食料自給率アップにつなげたいものである。

秋の夜長、もう一步飛躍して「夏の太陽エネルギーを貯え、冬に備えられないか」はたまた「無尽蔵にある資源の有効利用をもっと」考えてみるのもよろしいかと。もちろん、限りある資源の有効利用を考えるのが現実的、かつ急務ではありますね。

齢を経てからの発想の転換は少々難題とは思いますが、「感動・心のときめき」と「感性」だけは衰えたくないものである。

ダーウィン曰く「生き残る種というものは、最も強いものでもなければ、最も知能が高いものでもない。変わりゆく環境に最も適応できる種が生き残るのである」。

メタボを気にする元気な年金世代のがんばりが、今、試されるときであるように思う。

第7回 志那街道と 志那三郷

イラスト 大村恵

ゆっくり草津 街道物語

前号では、そろそろ大詰めに入ってきた大河ドラマ「篤姫」と草津宿の関わりについてお伝えしたこのコーナーも、いつもの街道に戻って、今回は琵琶湖に近い志那街道と志那三郷です。案内は石田はま子さんです。

志那三郷とは志那村・志那吉田村・志那中村をいい、現在の志那町・志那中町となります。

湖に近いこのあたりは、琵琶湖の対岸にある坂本や大津を湖上交通で結ぶ志那港があり、物資を輸送する重要な地でした。湖から陸への起点となる志那街道は志那港から始まり今宿（守山）までの7kmをいいます。

蓮海寺はかつて琵琶湖に面したお堂で、広々とした湖と対岸の比叡・比良山を背景にもち、港の面影を残す常夜灯や水面の

ハスが美しい、草津八大名所のひとつでした。現在は「さざなみ街道」が通り、車の通行量も増えるにつれ風景も変わってしまいました。が、今も残る石垣が、そこまですで湖があつたことを物語ります。このあたり約40年前には魚のせり市・堀や川・水門もあつたということで、漁港付近もずいぶん様変わりしたようです。

柳平湖を望むのどかな田園風景の一角に「ののかみさん」と呼ばれる『野々守大神』の石碑があります。三代將軍徳川家光が乗船したといわれる御座舟「弁財丸」はその用を終えて志那浜で焼却されました。大きな松が目印になる「ののかみさん」は御座舟をまつた場所ではないかといわれています。

俳諧の祖といわれる山崎宗鑑は志那の出身で、蓮海寺には

元朝の みるものにせん
不二の山

の句碑があります。他にも市内に2基の句碑があると聞きましたが、意外と気がついていないものですね。改めて訪ねてみようと思います。山崎宗鑑は連歌から俳諧をおこし室町・戦国時代に活躍しました。亡くなるまでを香川県観音寺市で過ごし、草津と姉妹都市の交流が続いています。

風寒し 破れ障子の
神無月

そして志那会館前には





「宗鑑はどちらと人の問うならば
ちと用ありてあの世へと言へ」

『人が宗鑑はどこへ行かれたのかと聞
いたなら、ちよつと用事があつてあの
世へ行つてゐると答えておきなさい。』
という意味の歌です。（草津
市教育委員会 生きるこころ歩むすが
た）今でも通じるしやれつゝ気のある人
物ですね。

風の神を訪ねる郷の一つめは志那神
社です。濠に沿つて松並木ともみじが
美しい参道を進むと現れる本殿。この
本殿は草津で最も古い木造建築で鎌倉
時代に建立された国の重要文化財で
す。境内にある礎石はさらに古く平安
時代のもつと言われ、ずつとこの地の
鎮守の杜とされてきました。

続いて訪れたのは樹齢400年の藤
で有名な三大神社です。こちらは風の
神の志那津彦命・志那津姫命と大宅公

主命をまつています。この3人の神
さまは志那三郷の大宮でもあり、三大
権現とも呼ばれました。藤原氏の繁栄
を願つて植樹されたという『ノダフ
ジ』は信長の叡山焼き討ちに見舞われ
たにもかかわらず、芽が出て現在のよ
うに大きく伸びました。「藤古木保存
会」の手入れにより、地面に届くかと
思われる「砂摺りの藤」は毎年5月こ
ろに美しい花を咲かせ、大勢の人たち
が鑑賞に訪れます。

最後に訪れた風の神は惣社神社で、
665年に天智帝の勅願で創建されまし
た。こちらには樹齢500年の藤の木
や歴史が感じられる鎌倉時代の宝塔があ
ります。惣社神社は昔から志那中村の
氏神さまとしてまつられ、毎年5月の
例祭に大うちわを扇ぐ風神踊り「サン
ヤレ踊り」が奉納されます。

草津サンヤレ踊りは志那神社・三大
神社・惣社神社のほか市内4つの地
域で行われます。『サンヤレ』は「山
野礼・山にお礼」の意味や「幸あれ」
「参弥礼」と書いたりします。疫病な
どの災いが起こらぬようにと願いを込め
て、鉦や太鼓を鳴らしながら踊るにぎ
やかな風流踊りです。

志那はあたりの風景だけでなく、音
や風も琵琶湖の近さを教えてくれます。

風災を鎮めるためにまつたそれぞれの
神は夫婦円満を願う夫婦の神といいわ
れ、氏神さまとして地元の人々に親し
まれてきました。
「風の神」「藤」「サンヤレ踊り」の
3つのキーワードが共通する志那三郷め
ぐりは市内の喧騒から離れ、鎮守の森
の静けさと田園風景に心が落ち着き、
しみじみと日本人であることを感じる街
道歩きでした。（荒川茂美）



志那のまちなみと水路

もっと志那！って方に まめ知識

淡水真珠の父 吉田虎之助

志那吉田の庄屋を努めてきた
吉田家の住宅は江戸時代、享保
年間の建築で、県の文化財に指
定されています。明治元年に生
まれた吉田虎之助は淡水真珠の
父といわれ、水産産業の発展に
尽力しました。



橘堂と慈音尼

橘堂は市の文化財に指定された観音立像があります。三面
六臂（3つの顔と6つの手）の特異な観音像は15年に一度、
開帳があります。人がより良い生き方を求めるための「道
得問答」を書いた慈音尼は志那吉田で生まれ、墓石が橘堂
にあります。

くさっ子どもフェスタ2009

～寒さに負けるな くさっ子 元気いっぱい 1,2,3～

来年**1月18日(日)** 10:00～13:30

野村運動公園グラウンド・市民体育館

昔懐かしい遊びや手作り遊び、もちつき
大会などで冬の寒さを吹っ飛ばせ!



みんな来てね。
まってるよ～



My ライフ My くさつ講座 ～くさつ的スローライフのススメ～

第7回 くさつ歳時記

「レンズを通して見たくさつ」

日時：12月7日(日) 10:00～12:30

講師：川那部光子さん

草津の四季の美しさ彩りを写真で見たり、
お話を聞く講座です。

どちらも

場 所：草津市立まちづくりセンター

参加費：各 500円

☆単発のお申し込みもOK

お申込み・問合せは、

当事業団 (565-0477) まで

第8回 おもしろ 楽しく お～い 老い!

「まちの文化・むらの文化」

日時：1月25日(日) 10:00～12:30

講師：熊谷栄三郎さん

楽しく人生を過ごすには? その秘訣を聞く講座で
す。

編 集 後 記

▼取材の数々を通じ、私たちの先輩のひたむきな努力に頭が下がる思いがすると同時に、お話からは、その時代を生きていた人々の喜びや悲しみが伝わってくるような気がしました。(中井)

▼愛用のGパンが破れて穿けなくなったが捨て難く破れの無い部分を取り、女房の花嫁道具のミシンで花瓶敷に変身させた。いやあ、お遊びは楽しいです。(橋詰) ▼昨今、猫も杓子もエコ、エコ、エコ。でも間違った情報が氾濫しています。本来のエコは身近な暮らしの中にあるのではないのでしょうか。(大條) ▼農業の暮らしについて考える機会がありました。草津のまちに、緑豊かな田園風景がいつまでも残っていてほしいと願っています。

(仲井) ▼先日、信楽方面へ紅葉と滝めぐり(九品の滝、三筋の滝、鶏鳴の滝)で秋を満喫。のどかな田園風景の中に昔懐かしい「いなぎ(稲掛け)」を見つけました。(矢原)



芸術
の化は
大自然から
生まれる

字・絵/中村明雄

市民編集ボランティア募集!

コミュニティくさつ編集部

(財)草津市コミュニティ事業団内

〒525-0037

滋賀県草津市西大路町9-6 (まちづくりセンター内)

電話 (077) 565-0477

ファックス (077) 562-9340

メール com-com@mx.biwa.ne.jp

URL http://www.kusatsu.or.jp/

community



再生紙使用

～地球にやさしいまちづくり～